公印省略

1農林試第697号の4
令和元年９月２日

各関係機関団体の長
各病害虫防除員　殿

福岡県農林業総合試験場長
（福岡県病害虫防除所）

令和元年度病害虫発生予報第６号（９月）について

このことについて、病害虫発生予報第６号を発表したので送付します。

予報第６号

アブラムシ類の多発傾向にご注意を！

冬春イチゴ育苗期の巡回調査では、アブラムシ類の発生が平年より多くなっており、今後も多発が予想されます。

本ぽでアブラムシ類が多発すると排泄物による果実等への汚れを生じるので、育苗期の防除を徹底し、本ぽに持ち込まないようにしましょう。

ワタアブラムシ

モモアカアブラムシ

多発時

＜予想される向こう１か月の天候（令和元年８月３１日～令和元年９月３０日）＞

前線や湿った空気の影響で、向こう１か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

期間のはじめは日照時間の少ない状態が続く見込みです。

向こう１か月の平均気温は平年並か高いでしょう。

向こう１か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 **並40** **高40%** **平年並か高い** 見込み	少20 並30 **多50%** **多い** 見込み	**少40** **並40** 多20% **平年並か少ない** 見込み

（福岡管区気象台　令和元年８月２９日発表抜粋）

９月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況（発生量）	９月の発生予報（発生量）	
		平年比	**平年比**	**前年比**
水稲	いもち病	やや多	**やや多**	**多**
	紋枯病	並	**やや多**	**やや多**
	トビイロウンカ	多	**多**	**多**
	斑点米カメムシ類	並	**並**	**やや少**
大豆	ハスモンヨトウ	やや少	**やや少**	**少**
	吸実性カメムシ類	やや多	**やや多**	**やや少**
カンキツ	黒点病	やや少	**並**	**並**
	ミカンハダニ	並	**並**	**並**
カキ	炭疽病	少	**並**	**やや多**
	フジコナカイガラムシ	少	**やや少**	**やや少**
	ハマキムシ類	やや少	**やや少**	**やや少**
果樹共通	チャバネアオカメムシ	やや少	**－**	**多**
冬春イチゴ（育苗期）	炭疽病	多	**多**	**多**
	ハダニ類	やや少	**やや少**	**並**
	アブラムシ類	多	**多**	**多**
茶	炭疽病	多	**多**	**多**
	カンザワハダニ	やや少	**やや少**	**少**
	チャノコカクモンハマキ	多	**やや多**	**やや多**
	チャノミドリヒメヨコバイ	少	**少**	**少**

注 1)　予報の発生量は平年（福岡県の過去１０年間）及び参考として前年との比較で、**「少、やや少、並、やや多、多」の５段階**で示しています。
＊果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量（予報）平年比は年次変動が大きいため－としています。

注 2)　予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、**少発生（－）**、**やや少発生（－～±）**、**並発生（±）**、**やや多発生（±～＋）**、**多発生（＋）**として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

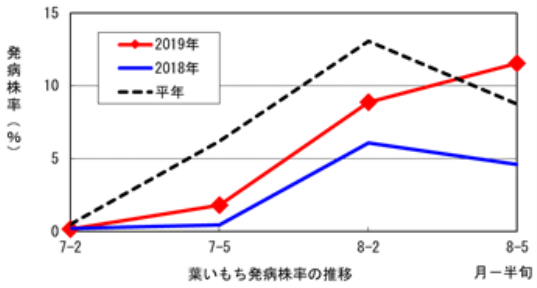
【普通作物：水稲】

普通期水稲

１　いもち病（穂いもち）

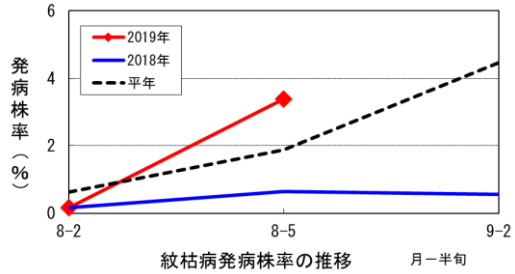
（１）予報の内容
発生量：平年よりやや多・前年より多

（２）予報の根拠
ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。
（葉いもち）発病株率 11.6%（平年 8.7%、前年 4.6%）
発生ほ場率 54.3%（平年 42.6%、前年 28.3%）
また、５月下旬植えの夢つくしで穂首いもちが確認された。
イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



（３）防除上注意すべき事項
ア　穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。
イ　**詳細は注意報第３号（８月２７日発表）を参照する。**
ウ　使用農薬は「平成３１年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。
エ　**農薬の使用および散布等にあたっては、Ｐ13 の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。**

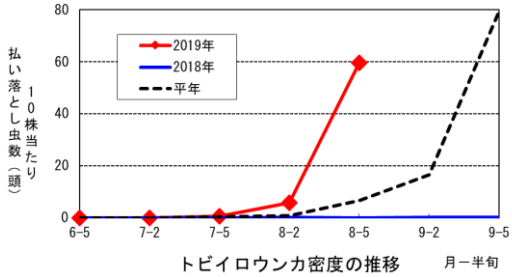
2　紋枯病



紋枯病発病株率の推移

（１）予報の内容
　　発生量：平年・前年よりやや多
（２）予報の根拠
　ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。
　　発病株率 3.4%（平年 1.9%、前年 0.7%）
　　発生ほ場率 17.4%（平年 20.8%、前年 15.2 %）
　イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。
（３）防除上注意すべき事項
　ア　出穂期以降、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。
　イ　農薬によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。

3　トビイロウンカ



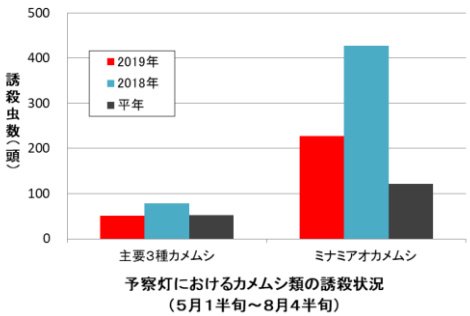
トビイロウンカ密度の推移

（１）予報の内容
　　発生量：平年・前年より多
（２）予報の根拠
　ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。
　　10 株当たり払い落し成幼虫数 59.5 頭
　　（平年 6.5 頭、前年 0.0 頭）
　　発生ほ場率 87.0%（平年 46.5%、前年 0.0%）
　イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

（３）防除上注意すべき事項
　ア　**詳細は注意報第２号（８月２３日発表）を参照する。**
　イ　本種は世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を必ず確認し、要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。
　　＜要防除水準＞
　　飛来後第２世代：100 株当たり　　100 頭以上
　　飛来後第３世代：100 株当たり 1,000 頭以上
　ウ　出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう丁寧に散布する。
　　また、収穫前日数に注意する。

4　斑点米カメムシ類

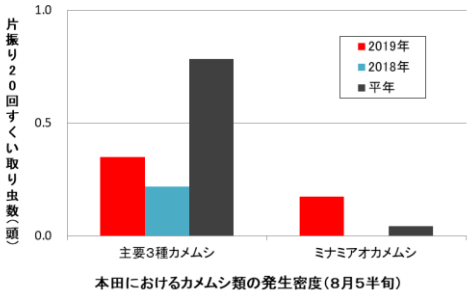
（１）予報の内容
　　発生量：平年並・前年よりやや少
（２）予報の根拠
　ア　県下５か所の予察灯における５月１半旬～８月４半旬の誘殺虫数は、主要３種カメムシは平年並、ミナミアオカメムシは平年より多、アカスジカスミカメは平年より少なかった（±）。
　　・主要３種カメムシ＜ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ、ﾎｿﾊﾘｶﾒﾑｼ、ｼﾗﾎｼｶﾒﾑｼ＞
　　51 頭（平年 52 頭、前年 78 頭）
　　・ミナミアオカメムシ
　　227 頭（平年 122 頭、前年 427 頭）
　　・アカスジカスミカメ
　　515 頭（平年 1,462 頭、前年 933 頭）



予察灯におけるカメムシ類の誘殺状況
（5月1半旬～8月4半旬）

　イ　８月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（±～－）。
　　・主要３種ｶﾒﾑｼ　（ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ、ﾎｿﾊﾘｶﾒﾑｼ、ｼﾗﾎｼｶﾒﾑｼ）
　　20 回すくい取り虫数 0.3 頭
　　（平年 0.8 頭、前年 0.2 頭）

発生ほ場率 10.9%
（平年 21.1%、前年 13.0%）
・ミナミアオカメムシ
20 回すくい取り虫数 0.2 頭
（平年 0.0 頭、前年 0 頭）
発生ほ場率 2.2%（平年 2.7%、前年 0%）
・アカスジカスミカメ
20 回すくい取り虫数 0.0 頭
（平年 1.0 頭、前年 0 頭）
発生ほ場率 4.3%（平年 20.6%、前年 10.9%）



本田におけるカメムシ類の発生密度（8月5半旬）

ウ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　防除時期は穂揃い 7～10 日後であるが、発生状況には充分留意し、発生が多い場合は農薬安全使用基準(使用時期、使用回数)を遵守し、薬剤防除を行う。

イ　カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【普通作物－大豆】

1　ハスモンヨトウ

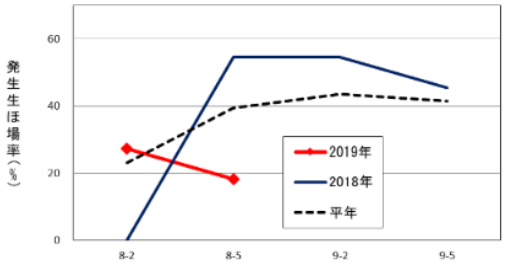
（１）予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年より少

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、100 株当たりの白変葉発生株数は平年より少なかった（－）。

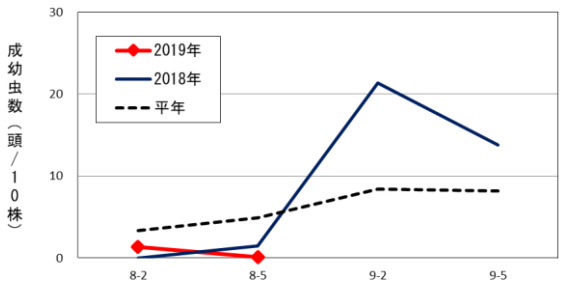
100 株当たりの白変葉発生株数 0.2 株
（平年 1.5 株、前年 0.5 株）
発生ほ場率 27.3%
（平年 39.4%、前年 54.5%）



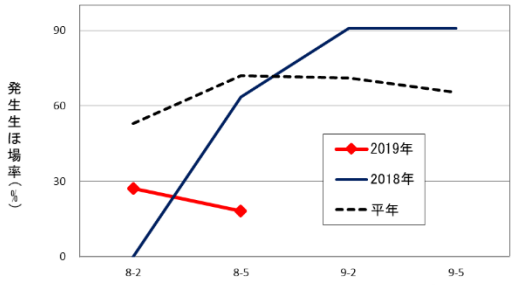
白変葉発生ほ場率の推移

イ　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10 株当たり幼虫数 0.1 頭（平年 4.9 頭、前年 1.5 頭）
発生ほ場率 18.2%（平年 71.9%、前年 63.6%）



ハスモンヨトウ幼虫の密度推移



ハスモンヨトウ幼虫の発生ほ場率の推移

ウ　８月１半旬～８月４半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、平年より少なかった(－)。

筑紫野市 223頭（平年 959頭、前年 362頭）
筑後市　 222頭（H25～H30年の6か年平均 961頭、前年 293頭）
行橋市　 110頭（H22～H30年の9か年平均 405頭、前年 691頭）

エ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　葉の食害による減収量が大きい時期は開花期前後（８月下旬～９月上旬）である。

イ　この時期に分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去するとともに、薬剤防除を実施する。

ウ　防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから 10 日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

２　吸実性カメムシ類

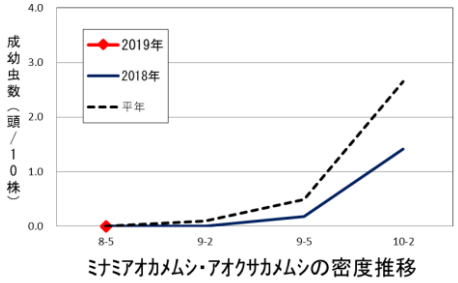
（１）予報の内容

発生量：平年よりやや多・前年よりやや少

（２）予報の根拠

ア　ミナミアオカメムシの県下５か所の予察灯における５月１半旬～８月４半旬の誘殺虫数は平年より多かった(＋)。

227 頭（平年 122 頭、前年 427 頭）



ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシの密度推移

イ　８月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ

10 株当たり虫数 0 頭（平年 0.0 頭、前年 0 頭）

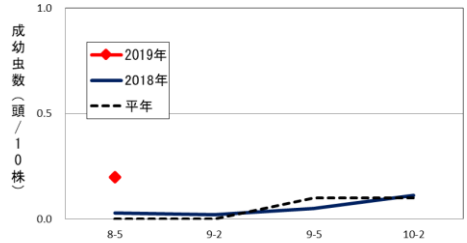
発生ほ場率 0%（平年 0.7%、前年 0%）

・イチモンジカメムシ

10 株当たり虫数 0.2 頭

（平年 0.0 頭、前年 0.0 頭）

発生ほ場率 27.3%（平年 3.0%、前年 9.1%）



イチモンジカメムシの密度推移

・ホソヘリカメムシ

10 株当たり虫数 0 頭（平年 0.0 頭、前年 0.0 頭）

発生ほ場率 0%（平年 3.6%、前年 9.1%）

ウ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

（３）防除上注意すべき事項

ア　防除適期は９月中～下旬の開花期後 30 日前後であるが、多発生の場合はその７～10 日後に２回目の防除を行う。

イ　カメムシ類は収穫時まで子実被害が続くため、発生初期の防除が重要である。

ウ　カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

【果樹：かんきつ】

１　黒点病

（１）予報の内容

発生量：平年・前年並

（２）予報の根拠

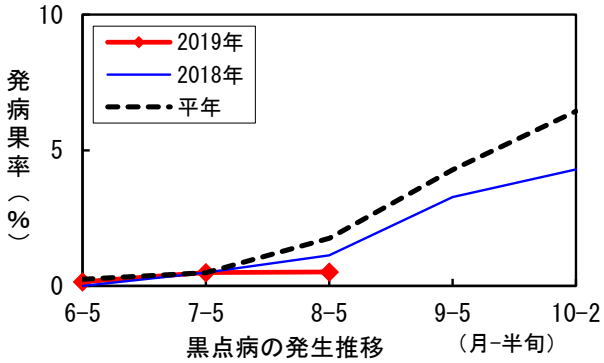
ア　８月５半旬調査の結果、発生量はよりやや少なかった（±～－）。

発病果率　0.5%

（平年　1.8%、前年　1.1%）

発生ほ場率 36.4%

（平年 38.5%、前年 50.0%）



黒点病の発生推移

イ　向こう１か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ　前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

ウ　農薬の使用および散布等にあたっては、Ｐ13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

２　ミカンハダニ

（１）予報の内容

発生量：平年・前年並

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

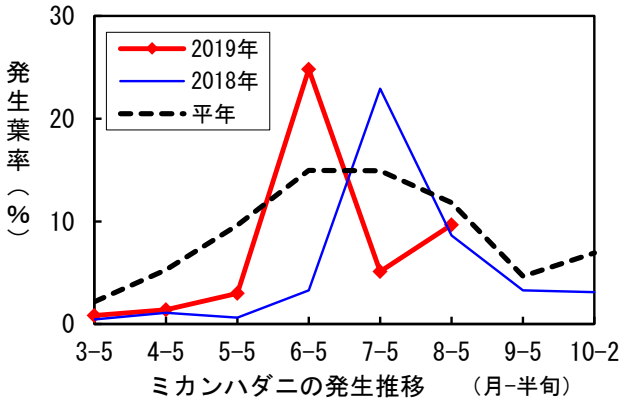
発生葉率　　9.7%

（平年 11.8%、前年　8.6%）

発生ほ場率 27.3%

（平年 61.7%、前年 63.6%）

イ　向こう１か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。



（３）防除上注意すべき事項

ア　薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテンション散布する。

【果樹：かき】

１　炭疽病

（１）予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病枝率　　0%（平年　0.1%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年　5.7%、前年 0%）

発病果率　　0%（平年　0.2%、前年 0%）

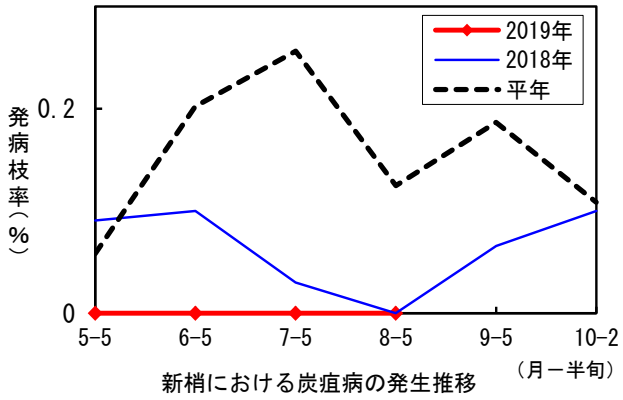
発生ほ場率 0%（平年 14.2%、前年 0%）

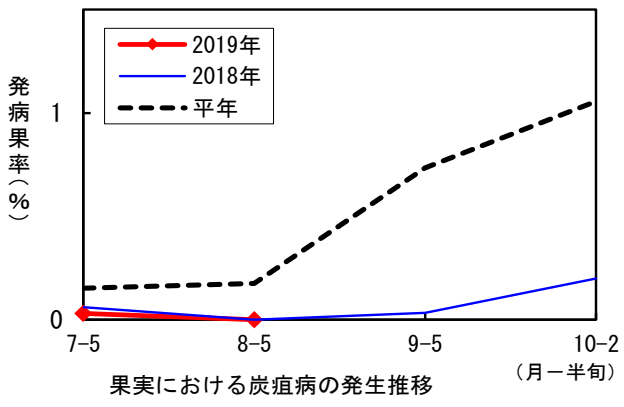
イ　向こう１か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ　降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。





２　フジコナカイガラムシ

（１）予報の内容

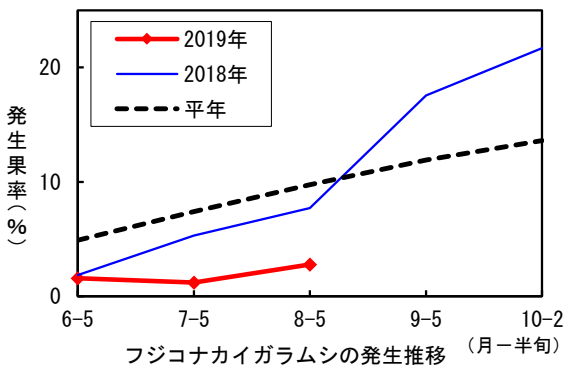
発生量：平年・前年よりやや少

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発生果率　　2.8%

（平年　9.8%、前年　7.7%）



発生ほ場率 63.6%
（平年 88.6%、前年 63.6%）

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（３）防除上注意すべき事項

ア　果樹カメムシ類の防除等で、やむを得ず天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ　薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理するとともに、散布むらがないよう十分量な薬量を丁寧に散布する。

３　ハマキムシ類

（１）予報の内容

発生量：平年･前年よりやや少

（２）予報の根拠

ア　第２～３世代と考えられる７月１半旬～８月４半旬までのフェロモントラップによる雄成虫誘殺数は、平年よりやや多かった（±～＋）。

＜調査地点はうきは市、平年値は2016～18年の平均＞

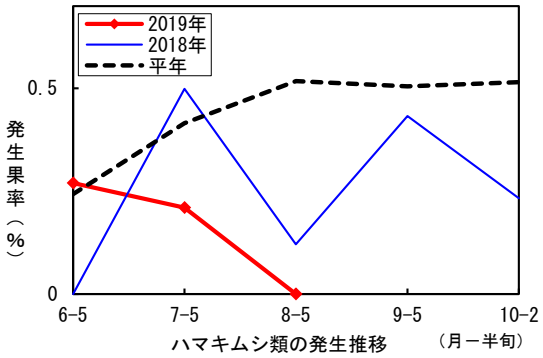
誘殺成虫数　チャノコカクモンハマキ 595頭（平年 339頭、前年 286頭）

チャハマキ　3頭（平年　6頭、前年　4頭）

イ　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発生果率　0%
（平年　0.5%、前年　0.1%）

発生ほ場率　0%
（平年 33.4%、前年 18.2%）



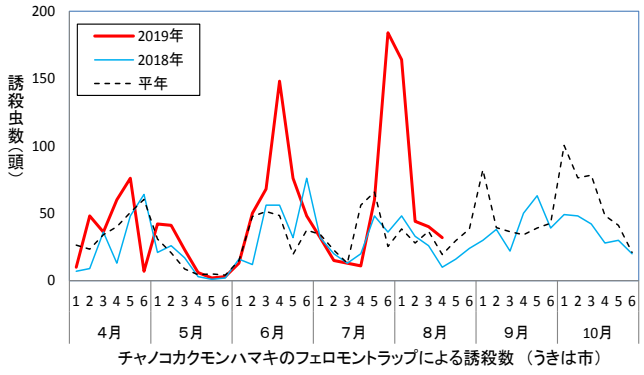
ハマキムシ類の発生推移

ウ　向こう１か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。

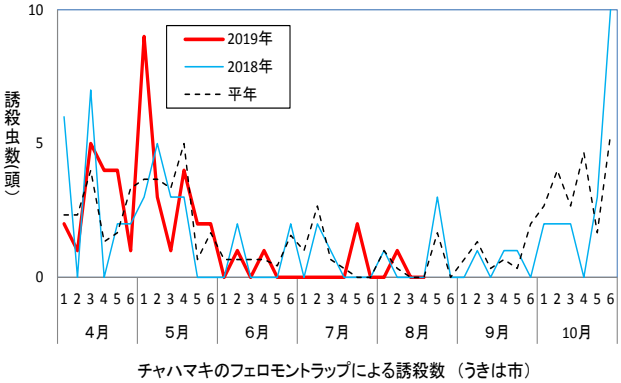
（３）防除上注意すべき事項

ア　ハマキムシ類は世代数が多く発生期間が長いため、成虫・幼虫が混発している。そのため、園内での成虫の発生量に注意して、成虫が最も多いときから７日後の若齢幼虫期を目安に防除を行う。

イ　幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップによる誘殺数（うきは市）



チャハマキのフェロモントラップによる誘殺数（うきは市）

【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

（１）予報の内容

発生量：前年より多

（２）予報の根拠　＜下表参照＞

ア　ヒノキ球果からの成虫離脱予想時期（８月１日付け、病害虫発生予察技術情報第３号参照）

は９月２半旬頃で、後期発生型の 2016 年並と予想されている（＋）。

イ　８月１半旬～４半旬までの予察灯５ヶ所の誘殺成虫数は、前年より少なかったが、うち２ヶ所では８月４半旬頃から増加傾向にある。また、フェロモントラップ４ヶ所の誘殺成虫数は、前年より少なかった（±～－）。

予察灯誘殺虫数（県内５ヶ所平均）　　：86 頭（前年 604 頭、2016 年 387 頭）

フェロモントラップ誘殺虫数（県内４ヶ所平均）：２頭（前年 128 頭、2016 年　12 頭）

ウ　８月５半旬調査のヒノキ球果ビーティングによる 14 ヶ所の捕獲成幼虫数は、前年より多かった（＋）。

平均捕獲成幼虫数：6.4頭（前年 5.1頭、2016年 7.7頭）

うち幼虫数：3.6頭（前年 0.7頭、2016年 5.4頭）

ヒノキ１球果当たりの口針鞘数：6.5本（前年 27.8本、2016年 17.2本）

口針鞘数は前年より少なかった。

エ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

表　成虫越冬量、ヒノキ球果着生量、ヒノキ球果から成虫離脱予想時期

年/項目	2016	2018	2019
発生型	後期	前期	後期 ＜予想＞
越冬成虫数（頭/㎡）	0.8	3.8	0.8
ヒノキ球果着生量	2.8 （やや少）	4.4 （中）	3.6 （中）
ヒノキからの離脱予想時期	９月２半旬	８月４半旬	９月２半旬

注1）越冬量（34地点、１月初～末調査）は常緑広葉樹林落葉下の越冬成虫数（１㎡当たり）

注2）ヒノキ球果着生量（28地点、5月5半旬～6月2半旬調査）はヒノキ球果の豊凶基準に基づき、極少を１～極多を7として算出

注3）ヒノキからの予想離脱時期は各年とも7月5半旬の口針鞘数から算出したもので、実測値ではない

（３）防除上注意すべき事項

ア　飛来時期は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ　広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ　薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ　降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ　今後の発生状況等については、病害虫防除所ホームページを参照する。

＜http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html＞

【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

１　炭疽病

（１）予報の内容

発生量：平年・前年より多

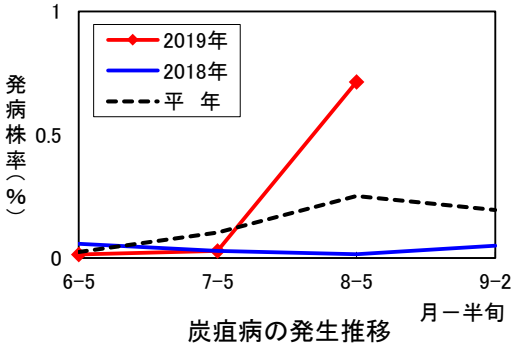
（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

発病株（苗）率 0.7%

（平年 0.3%、前年 0.02%）

イ　向こう１か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



炭疽病の発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　９月２日付け１農林試第１１７３号、技術情報第５号参照。

イ　農薬の使用および散布等にあたっては、Ｐ13 の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

２　ハダニ類

（１）予報の内容

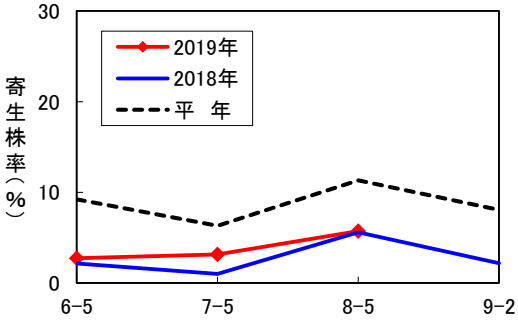
発生量：平年よりやや少・前年並

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生株率 5.7%（平年 11.3%、前年 5.6%）

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



ハダニ類の発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ　摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

ウ　多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ　夜冷短日処理や低温暗黒処理の前、定植前に必ず防除を行い、本ぽにハダニ類を持ち込まないようにする。

オ　抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に薬液が十分付着するよう、摘葉後に防除を行う。

３　アブラムシ類

（１）予報の内容

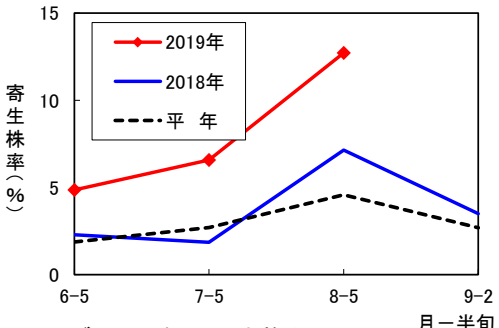
発生量：平年・前年より多

（２）予報の根拠

ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

寄生株率 12.7%（平年 4.6%、前年 7.1%）

イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



アブラムシ類の発生推移

（３）防除上注意すべき事項

ア　ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ　夜冷短日処理や低温暗黒処理の前、定植前に防除を行い、本ぽに持ち込まないようにする。

本ぽでは、天敵やミツバチを導入すると使用できる薬剤が限定されることから、育苗期の防除を徹底する。

ウ　薬剤感受性の低下を防止する観点から、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

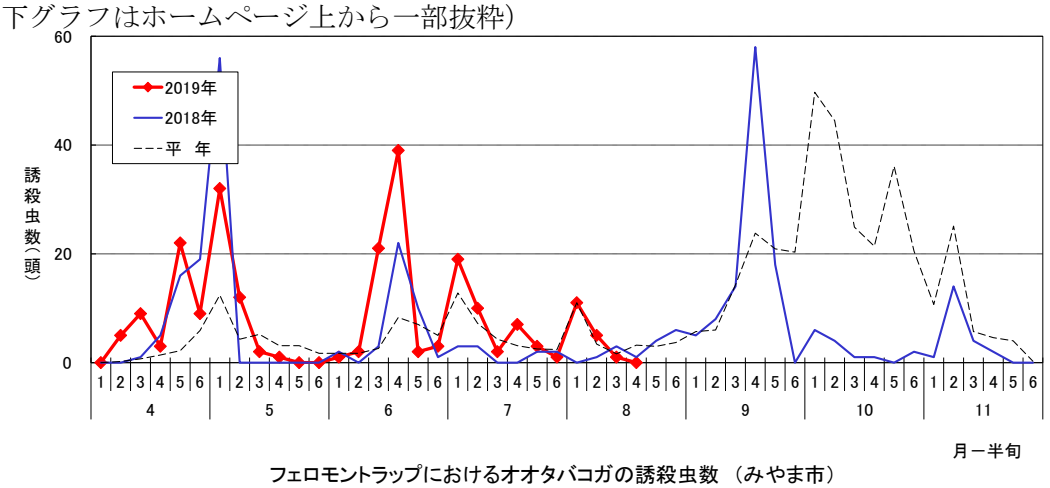
エ　若い葉の裏や未展開葉に寄生していることが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するよう、薬剤散布を行う。

【野菜：その他の病害虫】

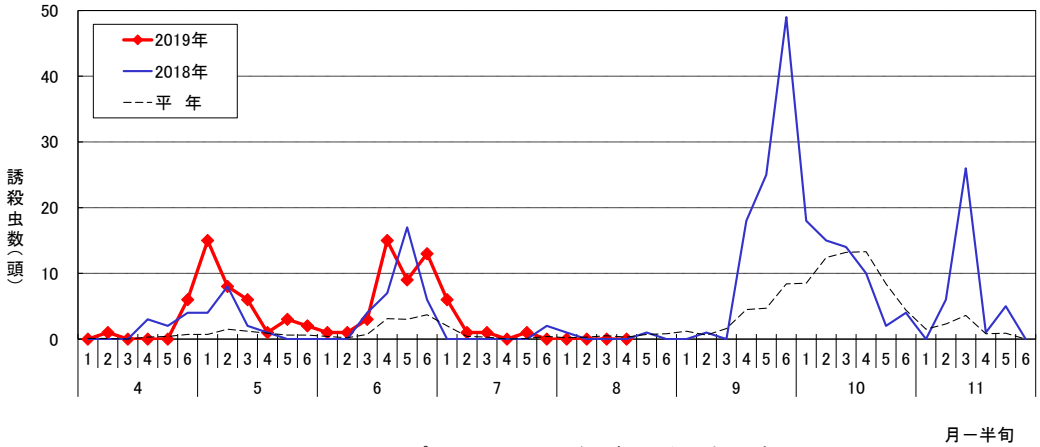
作物名 病害虫名	現況 （発生量） 平年比	**９月の発生予報 （発生量） 平年比**	** 前年比**	**防除上注意すべき事項等**
野菜共通 オオタバコガ	やや多	**やや多**	**並**	・地域によって発生量に差があるため、発生を確認したら直ちに防除を行う。 ・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 ・今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）
コナジラミ類	－ （※）	－ （※）	**やや少**	・早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。 ・施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4㎜以下にする。
ハスモンヨトウ	やや少	**やや少**	**やや少**	・薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。

※黄色粘着板によるトラップ調査は 2018 年から実施しているため、平年値はなし。

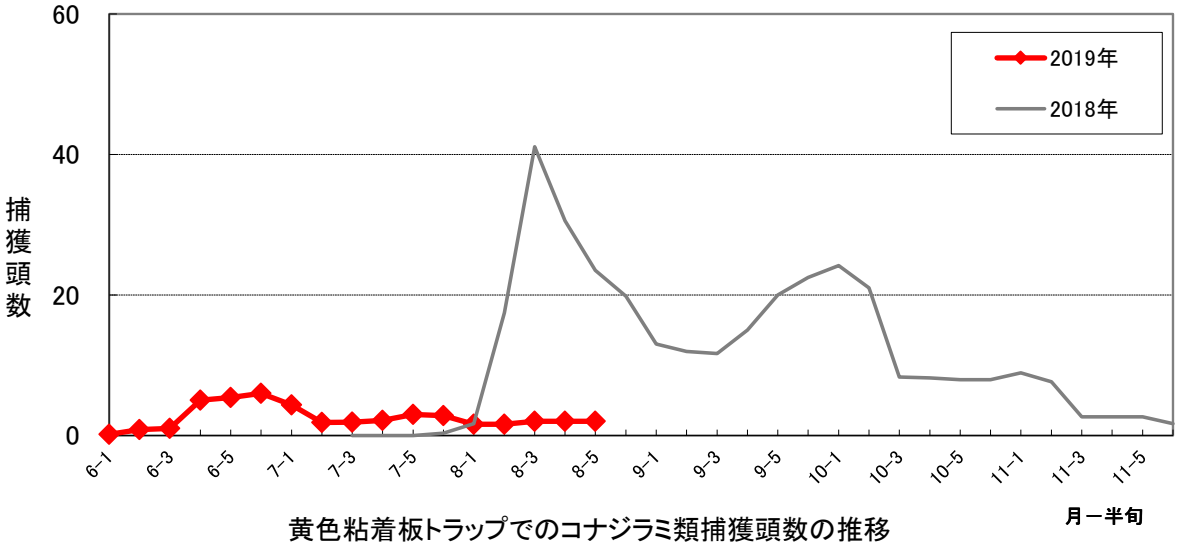
（以下グラフはホームページ上から一部抜粋）



フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数 （みやま市）

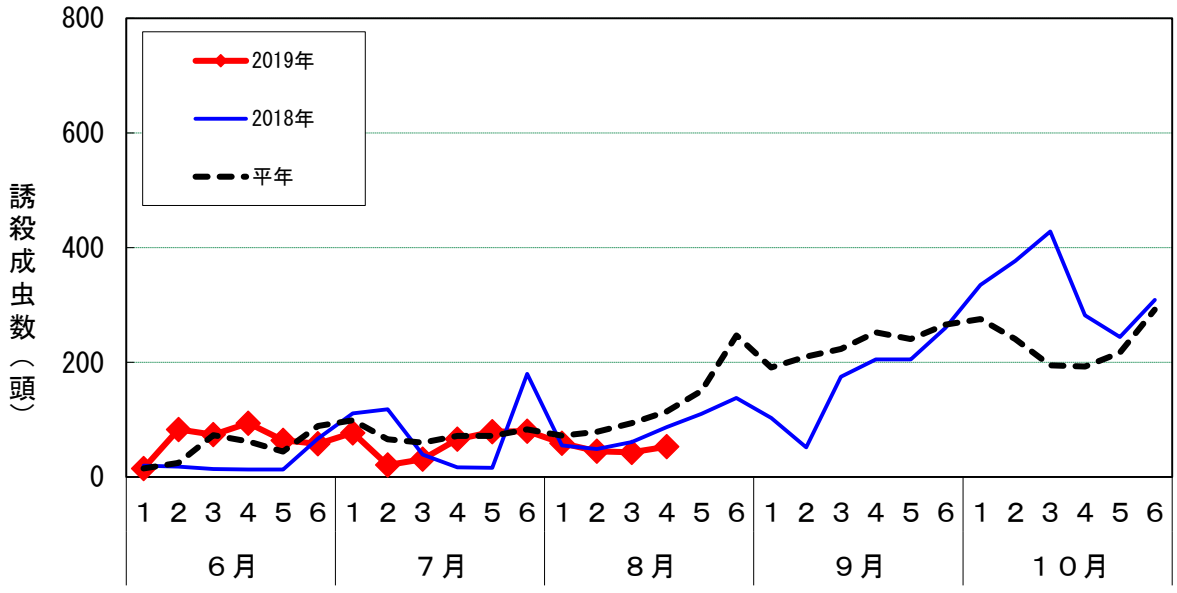


フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺虫数 （広川町）



黄色粘着板トラップでのコナジラミ類捕獲頭数の推移
（筑紫野市吉木）

※2018年からの調査のため平年値なし



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数（筑紫野市）

【茶】

1　炭疽病

（１）予報の内容

発生量：平年・前年より多

（２）予報の根拠

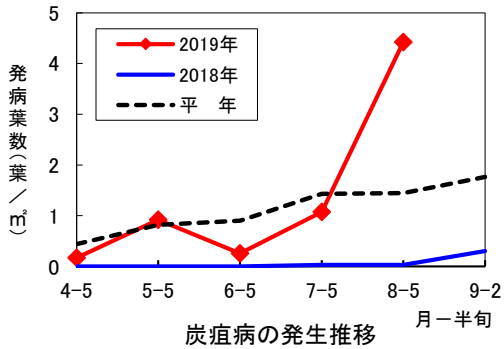
ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

発病葉数　4.4 葉（平年 1.4 葉、前年 0 葉）

発生ほ場率 50%（平年 32.3%、前年 10%）

イ　向こう１か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

（３）防除上注意すべき事項



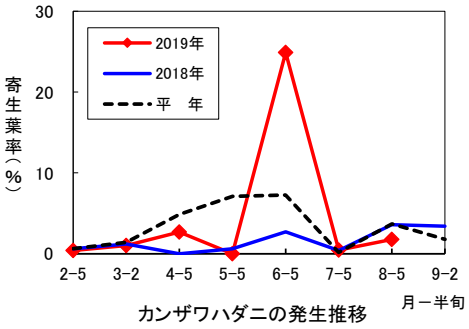
炭疽病の発生推移

ア　秋芽での発生に注意し、萌芽から１葉期と４～５葉期に防除を行う。
イ　雨滴により胞子が飛散伝搬するので、できる限り降雨前日までに防除を実施する。
ウ　薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
エ　農薬の使用および散布等にあたっては、Ｐ13 の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

２　カンザワハダニ

（１）予報の内容
発生量：平年よりやや少、前年より少

（２）予報の根拠
ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
寄生葉率　1.8%（平年 3.7%、前年 3.6%）
50 葉当たり寄生虫数 1.5 頭（平年 7.3 頭、前年 3.9 頭）
発生ほ場率　25%（平年 31%、前年 40%）
イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



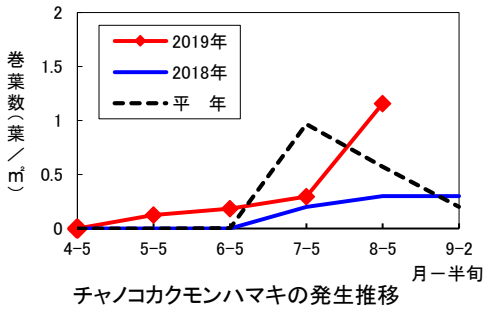
カンザワハダニの発生推移

（３）防除上注意すべき事項
ア　発生状況をよく観察し、寄生葉率が２%以上の場合は防除を行う。
イ　薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

３　チャノコカクモンハマキ

（１）予報の内容
発生量：平年・前年よりやや多

（２）予報の根拠
ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。
１㎡当り葉巻数　1.2 枚（平年 0.6 枚、前年 0.3 枚）
イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



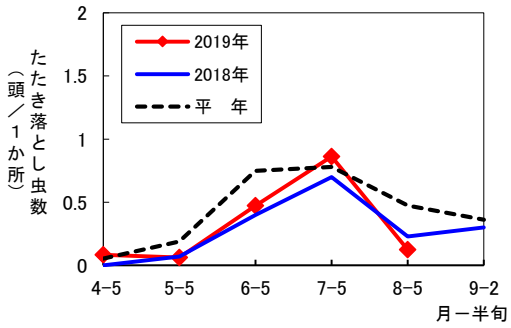
チャノコカクモンハマキの発生推移

（３）防除上注意すべき事項
ア　第３世代成虫の発蛾最盛期は、９月上旬以降と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから７日後を目安に防除を行う。
イ　巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

４　チャノミドリヒメヨコバイ

（１）予報の内容
発生量：平年・前年より少

（２）予報の根拠
ア　８月５半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。
１か所当りたたき落とし虫数　0.1 頭
（平年 0.5 頭、前年 0.2 頭）
イ　向こう１か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

（３）防除上注意すべき事項
ア　茶株を１０回たたき、Ｂ５版上で４頭以上発生している場合は防除を行う。
イ　新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
ウ　多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。

【茶：その他の病害虫】

病害虫名	現況（発生量）	９月の発生予報（発生量）		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	並	並	並	・秋芽生育期に降雨が多いと、感染、発病しやすくなる。 ・今年多発した園では、萌芽から１葉期までに防除を行う。
チャノキイロアザミウマ	少	少	やや少	・茶株を１０回たたき、Ｂ５版上で１０頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノホソガ	やや少	少	並	・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから７日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	並	やや少	やや少	・防除適期は若齢幼虫発生期で、第３世代幼虫の防除適期は、９月上旬～中旬と予想される。 ・虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので防除を行う。 ・幼虫は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜･隣接作物･河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

１　農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。
（例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる）

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

２　飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。
○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。
○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。
○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

３　保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

４　農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

５　防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

６　空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。
また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではＱＲコードを作成しています。
携帯電話のＱＲコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。